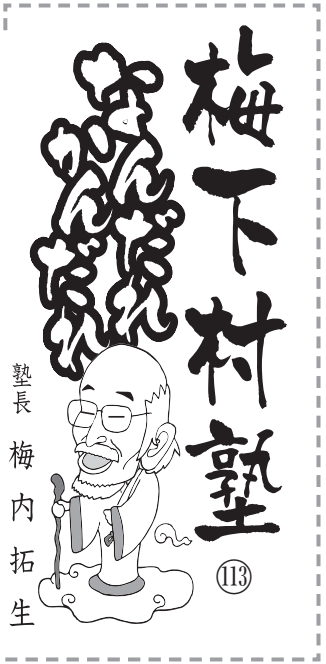
「森と水と命の惑星」国際会議

～地域と世界の心と魂を詠む～



（責任の共有）

6月4日（火）のJapan NewsにWashington PostのジャーナリストDavid Ignatiusの記事が掲載されていた。中国国家主席の習近平氏と米国大統領Obama氏との会談を視野に入れたものであった。過去10年以上米国は中国との政治交渉において、お互いの主張の論点が明かにされないままのフラストレーションの多い交渉をしてきた。これは、中国が昇る太陽の経済力を持った国として、認められたいと思い、それにこだわってきたが、お互いに果たすべき責任については話し合いを拒否してきたことであると述べている。今や世界は中国の新帝国主義の拡大路線に大きな警戒を抱くようになってきている。これを原文で伝えると、David Ignatius氏の心の奥にある感情が伝わってくる。「Beijin wants to be recognized as a rising economic power but refuse to be an active partner in maintaining security. Beijin has seemed to want a free trade ,without the corresponding responsibility」これに加え、古代ギリシャとスパルタ戦争の例を引いて、この戦争は避けられる可能性があったと述べている。そして、「It could have been averted by negotiations and wise policy. So,with America and China」と述べている。まさに2500年前の歴史は現代政治の鏡であり、学ぶべきものがたくさんあるというわけである。日本の政治家、知識人、ジャーナリストは、このような世界情勢に如何なる論理を以て対応しようとしているのか？先日引退した保守政治グループの重鎮が中国を訪問して、尖閣問題の棚上げに関して、田中角栄氏から聞いた話として、中国にご注進していることに、開いた口がふさがらなかった。まさに自虐史観の暗雲がここまで立ち込めているのである。一万年以上も続いた縄文文化の脈流には、責任の共有という脈流があることは縄文土器や考古学的調査から明らかになりつつある。自虐史観を乗り越えた新しい文化価値観を生み出し、世界に発信し、交流して、これを世界の人々と共有すべき時が来ている。旧気仙郡の人々の活動に大いに期待するものがある。

（東海新報記事と他のマスコミ報道から）

6月2日（日）の第1面に「共同で建築推進を　長部・要谷福伏地区　住まいの再建を考える会　陸前高田」価格や補助活用細かく議論が掲載されている。津波被害から逃れられる安全な住宅地は限られている。これに対して、地域共同で責任を共有して建築を進める活動には、心に響くものがある。まさに、旧気仙郡の人々の活動に大いに期待するものがあると心から思い、、ここに記述したい。